入出口

Iri de guchi

いりぐち

There and Back? Again

Oniki You

オニキヨウ

Iri de guchi

いりぐち

はじまりのうた

目次

ゆきて ―――――――― 〇七

迷宮入り ―――――――― 一七

タナカカナタの偏愛 ―――――――― 四七

お蔵出し ―――――――― 九三

かえりし？ ―――――――― 一二一

はんきょうのうた

ゆきて

渋谷駅でミナミと待ち合わせ。
人混みのざわめきをイヤホンで消す。
携帯電話をいじっているうちに音楽も消えた。
無音の中からトランクをゴロゴロ引く音が聞こえた。
顔を上げるとミナミがいる。
気まずげに笑って、遅れてごめんと詫びてくる。
別に良いよ、少ししか待ってないし。私は答える。
「電車が止まっちゃってさぁ」
隣を歩きながらミナミが言う。
「どこかの駅で、人身事故だって」
「月曜の朝から迷惑だね」
「本当だよね」とミナミも憤慨する。
それから少し考えて、今日は月曜日だっけ？　と首をひねる。
月曜日だよ。
社会人は普通に働いてるよ。
相変わらずのミナミに苦笑を禁じ得ない。
私たち大学生は冬休みのまっただなか、ただでさえ薄い曜日の感覚が狂っている。
明日も休みで、明後日も休み。毎日が日曜日みたいなものだ。

ただ、時間の感覚はしっかり持っておかないと。休みボケになるよ。
しっかり者の私はミナミにちょっとした説教をする。
えへへ、と笑ってごまかすミナミ。
これもいつものことだ。
でもさぁ、と空を見上げてミナミは言う。
「今日は本当に月曜日かな？」
「月曜日だよ」
「絶対にそうだと言い切れる？」
私は友達の顔を見る。
ミナミはにこにこしながら同じ質問を繰り返す。
今日は本当に月曜日かな？
そう言われると自信がない。曜日を確認したくなる。携帯電話を取り出すほどでもないから、周囲を見回して日付や曜日のついているものを探す。
しかし、なかなか見つからない。
駅前の巨大なディスプレイは背後に通り過ぎた。
私は昨日の夕飯を思い出す。夕飯を食べながら見たテレビ番組のことを。
あの番組は日曜日に放送される。
だから、今日は月曜日だ。

月曜日だよ、と断言する前に、ふわっとしたミナミの興味は別のことに移っている。
「地元に帰ったら何しようかなぁ」
「あっちにはどのくらいいる予定？」
「分かんない。すぐ帰ってくるかもしれない。ずっと帰ってこないかもしれない」
自由だなあ、と私は笑う。
私は実家から大学に通っているので、里帰りの感覚が分からない。
ただ、上京組の友達は、誰もが帰りのチケットを取って出発した。
「ミナミ、バイトしてたよね？　勤務シフトはどうするの？」
人ごとと知りつつ、余計な心配をしてしまう。
「大丈夫だよ」とミナミは笑う。
「みんなにお願いしてきたから。うまくやってくれると思うよ」
「良いバイト先だね」
「バイト先じゃないよ。みんなだよ」とミナミは笑う。
「あなただってそうだよ」
トランクのホイールがアスファルトを滑る。
スクランブル交差点を抜けてセンター街へ。
平日も休日も大賑わいの渋谷に珍しく人がいない。
へぇ、こんなことってあるんだ。ゴミだらけの無人道路を見て私は感心する。

誰もいない街・渋谷。
写真に撮っておきたい。
「すごく助かったよ」
隣を歩きながらミナミが言った。
「あなたが理解のある人で良かった。留学先で日本語が通じる人に出会えたみたい。力を貸してくれてありがとう」
「そんな、大袈裟だよ」と言いつつ、私は照れる。
褒められたことより友達からお礼を言われるこの状況が照れくさい。
「ファンタジーやオカルトが好きな人はたくさんいるよ。今だって異世界転生モノの小説が流行しているじゃない」
「ファンタジーもオカルトもよく分かんない」とミナミ。
ミナミは架空の世界に興味がない。
研究対象といっていいほど熱中しているのはこちら側の反転だ。
飲み会で酔っ払ってうっかり口を滑らせ、そういうものに興味があった私が根掘り葉掘り問いただして事情を知った。
そして、私たちは秘密を共有し合う仲になった。
「ハリー・ポッターは知ってるよね？」
「もちろん。あっちでもすごく流行ったよ」

「映画見た？」
「途中までは見たような……」
ミナミは頭を掻いて内容を思い出そうとする。
「ハリーがホグワーツに行くところ良いよね。なんとかの何番線ホームの……」
「9と4分の3番線？」
そう！それ！ミナミは笑う。あのシーン大好き。いつ見てもドキドキするよねぇ。
私たちは少ない共通点を見つけて少し盛り上がる。
それも長くは続かない。
誰もいない道の真ん中、ミナミは立ち止まる。
コートのポケットからスマホを取り出し、宙にかざして振り回す。
背伸びをしたり、かがんだり、無人道路を行き来する姿は忙しない。
その背に向かって私は尋ねる。
「ミナミも魔法が使えるの？」
「使えないよ。マグルだよ」
「何してるの？」
「Ｗｉ－Ｆｉスポットを探してる」
「Ｗｉ－Ｆｉスポット？」
「そう」

この辺りにあるはずなんだけど……とつぶやく声が不安げだ。
おかしいな、誰かが移動したのかな。画面に釘付けになるミナミ。
こればかりは手伝えない。
私はその場に立ち尽くし、本日の曜日を考える。
考える間もなく、携帯電話を見た方が手っ取り早いとポケットをまさぐる。
何かとぶつかったのだろうか、タップしてもディスプレイは黒いまま。電源が切れてしまったらしい。
この機種は再起動まで時間がかかる。
こういうとき、うずうずする。
ドキドキではなく、うずうずだ。
身体が急いで、平常心を保てない。
こんなときこそ魔法が使えたらいいのに。
携帯やパソコンの起動を早くする魔法を。
Ｗｉ－Ｆｉがすぐに繋がる魔法を。
「見つかった」とミナミは言った。
路地にヒビが入り、穴が空く。
紙の裂け目に似た小さな穴。中は真っ黒で、反対側が見えない。
私は「ハリー・ポッター」ではなく「銀河鉄道の夜」を思い出す。

宇宙の果てにある、石炭袋の穴。
一筋の光も差さない、終着駅。
「本当に助かったよ。全部あなたのおかげだよ」
ミナミは笑う。
私のおかげ？
助かったって、何が？
私は考える。
私たちは友達になったばかりで、互いのことをよく知らない。
こちら側の世界について懇切丁寧に説明をしたり、ミナミのピンチ（ないだろうけど）を救ったこともない。
そもそも、ミナミのいるあちら側も大して変わらない。
ただ反転しているだけで、社会の秩序や文明の進歩は同じ。
山手線の駅の数も同じであれば、駅前のハチ公像も代わり映えがない。
「ねぇ、このあと暇？」
ミナミが尋ねる。
「暇だったら、遊ばない？」
「実家に帰るんじゃないの？」
「帰るよ。だからさ、渋谷にあるわたしの実家に寄っていかない？」

「ミナミ、渋谷区に住んでるの？」
「そうだよ。なにげにわたしは都会人なんだよ」
すごいなぁ。生まれたときから渋谷に住んでいるなんて。朝も夜も遊び放題じゃん。
束の間、私は憧れて、すぐに我に帰る。
ミナミの帰省に付き合うわけに行かない。今夜は別の友達と予定がある。
ここ、渋谷で。
ＤＪの追っかけをしている友達とクラブに行く予定だ。
大丈夫だよ、とミナミは強く言う。
「ここは渋谷だよ。帰ろうと思えばすぐ帰れるよ。なんならあっちの渋谷から直接クラブに行けば良くない？」
そうだなぁ、と私は思う。
どちらにせよ変わらない。
こっちも渋谷だし、あっちも渋谷だ。
ミナミに手を引かれるがまま、黒い穴へ足を踏み入れる。
……結局のところ、今日は何曜日だっけ？
ドキドキではなく、うずうずする。